

Contents *****

特集：2022 年米中間選挙の直前情勢	1p
<今週の”The Economist”誌から>	
”What Donald Trump understands” 「ドナルド・トランプの世界」	7p
<From the Editor> 長野市にて	8p

特集：2022 年米中間選挙の直前情勢

米中間選挙は、投票日の11月8日まで残り4週間を切りました。現時点の見通しは「上院はいい勝負、下院は共和党優勢」ですが、思ったよりも接戦になっていて、「大統領選挙並みの熱気」との声も聞こえてくるようです。これまでも選挙見通しは激しく変動しており、かつてなく予想の難しい選挙ということになりそうです。

問題はこれから投票日に向けての終盤戦です。「最後の決め手はやはり経済」と考えるべきなのか、それともウクライナなどで「オクトーバーサプライズ」があり得るのか。どんな結果が出て、その後はどんなシナリオが控えているのか。どんな波乱を警戒すべきなのか。

2022年の米国政治は、間もなく山場を迎えます。

● 「愛された大統領」ほど中間選挙では議席を減らす

「民主党支持者は大統領候補者と恋に落ちる」

これは至言であろう。ジョン・J・ケネディ（35）もジミー・カーター（39）もビル・クリントン（42）もバラク・オバマ（44）も、まさしくそんな感じであった¹。ただしハリー・S・トルーマン（33）やリンドン・ジョンソン（36）のような「事故による大統領」（副大統領からの昇格）になると、支持のボルテージはあまり上がらない。ゆえに1948年のトルーマン再選はギリギリの票差となったし、1972年のジョンソンは再選出馬を辞退してしまう。おそらく彼らは、「自分は有権者に愛されていない」と感じていたのであろう。

その点で現在のジョー・バイデン大統領（46）は、ユニークな存在である。民主党支持者はバイデン氏をさほど愛していない。彼が民主党の大統領候補者になれたのは、「彼以外ではトランプに勝てない」という打算が働いたからである。

¹ カッコ内の数字は「第×代大統領」を指す。

米中間選挙についてしばしばいわれることは、「新大統領が最初に迎える中間選挙は試練」ということである。これは1994年のクリントン政権、2010年のオバマ政権にとって顕著であった。なにしろ下院の議席数を50~60議席も失ったほどである。

ただしこれは、「候補者に激しい恋をした2年後の現象」であった、と考えるとわかりやすい。さすがに2年もたつと、一度は恋に落ちた候補者のアラも見えてくる。まだ愛情が続いていた場合も、中間選挙に大統領自身は出馬しない。惚れた大統領が出ないのなら、「だったら、まあいいや」ということで投票率が下がる。かかる熱意のギャップにより、「与党が負けるのはお約束」という伝統ができたのではないか。

○歴代大統領が初めて迎えた中間選挙での結果

	上院	下院	
1982年 ロナルド・レーガン	±0	▲26議席	
1990年 ブッシュ Sr.	▲1	▲8	
1994年 ビル・クリントン	▲10	▲54	←大敗！
2002年 ブッシュ Jr.	+2	+8	
2010年 バラク・オバマ	▲6	▲63	←大敗！
2018年 ドナルド・トランプ	+2	▲40	←大敗！
2022年 ジョー・バイデン	?	?	

その点、2022年の中間選挙はかなり異例である。バイデン氏はもともと支持者から強く愛されていない大統領であるから、普段の支持率はさほど高くない。しかし選挙の投票日が近づくにつれて、「アイツを負けさせたらマズい」という打算が蘇る。バイデン政権支持率は7月下旬に底打ちして、8月には4割台をкаろうじて回復した。それは「もともと打算で選んだ候補者だったから…」という理由も無視できないように思える。

逆に共和党の事情はどうか。冒頭のセリフの共和党版を考えるとしたら、「共和党員は親が決めた相手でも納得して投票する」であろう。歴代大統領が「最初の中間選挙」で受けた審判を比較すると、共和党の大統領は民主党に比べてずっとマシである。2002年のブッシュ Jr.に至っては、むしろ議席を増やしているほどだ。これは「9/11 テロ事件の翌年だったから」と説明されることが多いが、「そもそも共和党の大統領は支持者の熱狂度が低く、2年後の失望も少なく済む」と理由もあったのではないか。

こうした構図は、今ではちょうど入れ替わっているのではないか。民主党支持者がバイデン政権に対して冷淡である反面、「共和党支持者はトランプ氏と恋に落ちている」（トランプ支持者は、そもそも従来の共和党員とは別物と考えるべきかもしれない）。つまり共和党と民主党の熱狂度は、以前とパターンが逆転している。実際にトランプ大統領は、2018年の中間選挙では下院で40議席も減らしている（ご当人は、「上院では議席を増やしたから勝ちだ！」と言い張っていたが）。

●直前情勢は「上院はいい勝負、下院は共和党優位」

今年の中間選挙が読みにくいのは、こんな「愛憎ポリティクス」が陰を落としているからであろう。選挙予想の大御所、チャーリー・クック氏は、「「これだけ激しく優劣が入れ替わる選挙は見たことがない」と指摘する（“Volatility Is a Constant in This Campaign Season” National Journal Oct.3rd）。大統領選挙の年ならいざ知らず、有権者の関心が低いはずの中間選挙でこれだけの変動が起きるのはめずらしい、とのこと。2022 年中間選挙には、大統領選挙の年並みの熱気があるということになる。

クック・ポリティカルレポートの最新の読み筋は、下記のようなものだ²。上院では民主党が現有 14 議席中 12 議席、共和党が同 21 議席中 19 議席を固め、4 議席が“Toss up”（形勢不明）となっている。上院はほぼイーブン、と見ていいだろう。仮に 2 勝 2 敗となれば、今のままの「50 対 50」の議席が続くので、民主党としては事実上の「勝ち」となる。

現時点の票読みは…？（クック・ポリティカルレポート）
「上院はいい勝負、下院は共和党優位」

THE COOK
POLITICAL
REPORT
WITH AMY WALTER

- 上院（100議席）＝任期6年/35議席改選（民主14vs.共和21）10/4



- 下院（435議席）＝任期2年/全数改選（民主220vs.共和211欠4）10/11



<https://www.cookpolitical.com/>

下院では共和党側が、Solid 189+Likely 11+Lean 11 議席の合計で 211 議席となり、Toss up 31 議席のうち 7 つ以上を取れば過半数を超える。下院は共和党優勢と見ていいだろう。とはいえ、議席数の差はいいところ 10~20 議席程度となり、以前に考えられていたほど圧勝ということにはならないようだ。

それでも来年以降は、下院議長が民主党のナンシー・ペロシから共和党のケビン・マツカーシーに代わることになる。カリフォルニア州選出で 57 歳、早い時期からのトランプ支持者である。議会内の委員長ポストも揃って共和党に移ることになる。2023 年以降の米国政治は新たな立法が通りにくくなり、少なくとも今までより停滞気味となるだろう。

² 10月12日のテレビ東京『ニュースモーニングサテライト』で筆者が紹介した数字とは、下院が1議席だけ変わっている（Lean Democratの1議席がToss upに移行した）。

●上院選挙区の Toss up 4 州は「何勝何敗」か？

それでも民主党が上院の多数を維持できるのであれば、バイデン政権にとって状況はそれほど悪くはない。上院は閣僚人事や大使などの承認権を有するので、野党が多数となると一気に政策運営が難しくなってしまうのだ。

上院の注目選挙区は以下の通り。民主党現職では 4 州、共和党現職では 5 州の選挙区が僅差となっていて、現在はジョージア州、ネバダ州、ペンシルベニア州、ウィスコンシン州の 4 州が”Toss up”と認定されている。

上院の激戦州を展望する～下線は空白選挙区（現職が引退済み）
民主党は4つのToss up州を2勝2敗でOK

民主党現職	共和党現職
<ul style="list-style-type: none"> アリゾナ州 = Lean D マーク・ケリー ← ブレイク・マスターズ <u>ジョージア州 = Toss up</u> ラファエル・ワーノック ← ハーシェル・ウォーカー ネバダ州 = Toss up キャサリン・コルテス・マスト ← アダム・ラクサルト ニューハンプシャー州 = Lean D マギー・ハッサン ← ドン・ボルダック 	<ul style="list-style-type: none"> フロリダ州 = Lean R マルコ・ルビオ ← ヴァル・デミングス <u>ノースカロライナ州 = Lean R</u> テッド・バッド ← シェリ・ピースリー オハイオ州 = Lean R J.D.ヴァンス ← ティム・ライアン <u>ペンシルベニア州 = Toss up</u> メフメト・オズ ← ジョン・フェッターマン ウィスコンシン州 = Toss up ロン・ジョンソン ← マンデラ・バーンズ

もっとも単純に、”Toss up”→確率 50%→2 勝 2 敗などと考えるべきではないらしい。クック・ポリティカルレポートのエイミー・ウォルター氏によれば、「接戦となる選挙は、どちらかの政党に偏ることが多い」という³。つまり、4 勝 0 敗や 3 勝 1 敗になっても驚いてはいけないということだ。

確かに過去には接戦と見られていた選挙で、しばしば雪崩のような現象が起きている。近いところでは、昨年 1 月 5 日にジョージア州で行われた上院決選選挙がある。同州では勝利に 50%以上の得票が必要とされ、11 月の選挙では決着がつかず、補欠選挙を含む 2 つの上院選挙がいずれも決選投票になだれ込んだ。事前の予想は「1 勝 1 敗」だったが、いずれも僅差で民主党の 2 勝 0 敗となり、それで上院が今の「50 対 50」になった経緯がある。

勝敗の分かれ目となったのは、共和党候補者が極めつけのトランプ支持者で、「11 月の選挙は盗まれた！」と強弁したことである。それで穏健派の共和党支持者が棄権に転じ、その差が明暗を分けたと言われている。その時の補欠選挙で当選した民主党のラファエル・ワーノック上院議員は、2 年後の今年、早くも再選のときを迎えている。

³ Historically, Toss Up Races Break Decidedly Toward One Party (October 13, 2022)

というわけでジョージア州は注目選挙区となる。共和党の挑戦者、ハーシェル・ウォーカーは元アメフトのスター選手で、典型的なトランプ支持の **MAGA 候補** である。今月になって、「過去に恋人の妊娠中絶費用を払っていた」というスキャンダルが浮上した。ウォーカーはもちろん「中絶反対」を唱えており、普通ならこれで一発アウトとなりそうな事件だが、まだまだ情勢は”Toss up”のままである。

●投票日に向けての注意点と3つのシナリオ

ということで、11月8日の投票日まではまだまだ山あり谷ありと見なければならぬ。まず、注目しなければならないのが経済指標である。

10月13日に公表された9月CPIは、前年比+8.2%（市場予想+8.1%）となった。まだまだインフレに沈静化の気配はなく、11月1-2日に予定されている次回のFOMCは「0.75%利上げ」が濃厚となっている。まさか中間選挙の直前に、これだけの規模の利上げが行われるとは、半年前には考えてもみなかったことである。

ガソリン価格の動向も影響が大きそうだ。夏以降、1ガロン5ドル台まで上がった価格はせつかく3ドル台まで下がってきたのに、今月、OPECプラスは日量200万バレルの減産を決めた。これで再上昇に転じたら、バイデン政権としては痛手ということになる。

ウクライナ情勢も不穏である。ロシアが戦術核を使う可能性はあいにくゼロとは言えない。いわゆる「オクトーバーサプライズ」があるかもしれない。

先が見えないということでは、「トランプ・ファクター」も無視できないところだ。最終局面ともなれば、二大政党は「無党派層狙い」を意識せざるを得ず、むしろ「トランプ隠し」が必要な局面と言える。とはいえ、トランプ氏自身がそれで納得するとは思えず、何かサプライズを仕掛けてくるかもしれない。それがどんな効果を発揮するかは、

とりあえず以下の3つのパターンを考えておけば良いのではないかと思う。

1. メインシナリオ（民主党が上院、共和党が下院を制す）：60%

バイデン大統領が民主党内で求心力を維持する。共和党内では「トランプ氏責任論」が噴出。2024年に向けて他の候補者（ロン・デサンティス Florida 州知事、リズ・チェイニー前下院議員などの活動が活発化）

2. リスクシナリオ①（共和党が上下両院で勝利）：30%

インフレ悪化、ウクライナ戦況悪化などにより民主党が大敗。トランプ氏は2024年に向けて出馬を宣言。バイデン大統領はレイムダック化し、内政面で身動きが取れなくなる。民主党内では、2024年に向けて新しい大統領候補者選びが始まる

3. リスクシナリオ②（民主党が上下両院で勝利）：10%

「反トランプ」の民意が思ったよりも強く、共和党は大敗するものの、敗北を認めない候補者が多く政治的な混乱が続く。23年には民主党内では左派の勢力が強まり、新たな財政支出を求めるなど、バイデン政権を突き上げるようになる。

●選挙後はトランプ氏の言動に注意

最後に選挙後の政治日程を確認しておこう。

投票日が過ぎてからも、選挙結果はすぐには確定しないだろうし、「負けを認めない」などのトラブルも続出しているはずだ。そして前述通り、ジョージア州上院選は1度で決着せず、12月6日の決選投票に突入する可能性がある。その場合、上院は「50対49」となっている公算が大なので、当日の決戦は両陣営ともに力が入ることだろう。

11月8日に当選した候補者は、新たに年明け後の1月3日から議員としての任期を得る。それまでは現在の議員の任期となるので、年内には最後のお務めとなる「レイムダック・セッション」が行われる。ところがこの時期の米国社会は、「感謝祭」と「クリスマス」があるために会期が短い。何か新しい法案をまとめるほどの時間は残されていない。

最低限、決めてもらわなければ困るのは 12月13日に失効するつなぎ予算の延長である。これがないと「政府閉鎖」となるから、延長は MUST である。とはいえ、選挙後の両党は陰険な雰囲気になっていて、協力の機運は乏しくなっているだろう。

いつものことながら、中間選挙の終わりは2年後の大統領選挙へのスタートを意味する。トランプ前大統領の2024年選挙への出馬宣言は、中間選挙から年末までのどこかのタイミングとなるのではないか。その時点で、中間選挙においてMAGA候補がどれだけ勝っているかが重要となることは言を俟たない。ただし上院における共和党の苦戦ぶりを見る限り、必ずしも状況は芳しくないのではないか。

ともあれ、2024年に向けての戦いがすぐに始まることになる。

○年末に向けての米政治日程

- 11月1-2日 **米FOMC**→0.75%利上げ？
- 11月6～18日 **COP27** (エジプト、シャルムエルシェイク)
- 11月8日 **米中間選挙**
- 11月15-16日 **G20 首脳会議** (インドネシア・バリ島) →米中首脳会談？
- 11月18-19日 **APEC 首脳会議** (タイ・バンコク)
- 11月下旬～12月中旬？ **レイムダック・セッション**
- 11月24日 感謝祭
- 12月6日 **ジョージア州上院選挙の再選挙？** (勝利には50%の得票が必要)
- 12月13日 **米つなぎ予算が失効** (再延長へ？)
- 12月14-15日 **米FOMC**→0.5%利上げ？
- 年内 **トランプ前大統領が2024年へ出馬宣言？**
- <2023年>
- 1月3日 **米新議会が発足**

<今週の”The Economist”誌から>

”What Donald Trump understands”

「ドナルド・トランプの世界」

Lexington

October 3rd 2022

*近年、どれだけ多くの「トランプ論」を聞いたことでしょうか。今週も The Economist 誌の米国政治オタクコラムが、あいかわらず冴えた議論を展開しています。

<抄訳>

ドナルド・トランプは世の中をよくわきまえている。少なくとも彼の敵たちよりもずっと。人間の欲や臆病さ、利己心などの弱さを熟知しているから、彼はいつも自信満々なのだ。何十年にわたって、そして大統領としての任期の中で、その信念はさらに裏付けられてきた。

「ムッソリーニ流では無理だ」と、2016年にテッド・クルーズ上院議員はトランプ不支持の理由を述べた。だが彼はトランプに屈服することになる（妻をひどく攻撃されたというのに）。それに同情したジュリアーニは、後にトランプに仕えて自らの評判を落とした。

あからさまな嘘と無能ぶりにかかわらず、なぜ彼は成功してきたのか。不動産業でもエンタメでも政治でも同じ問いが繰り返されてきた。その答えは彼ではなく、我々全員にある。

NY Times 紙と CNN に務めるハーバーマン女史は、不動産業者時代から彼を追いかけてきた。いわく「彼は批評家たちよりも賢く、米政治史上比類のない生存本能を有する」と。

70~80年代の不動産家時代から、トランプ氏は低い期待感と冷笑的信念の人だった。部族間競争には必ず勝って、敵も味方も支配すべし。あらゆるものは取引材料となる。嘘を重ねればメディアは飛びつく。虚名は力であり、政治家のみならず検察官も靡くののだ。

同じ信念が大統領職でも貫かれた。FBIのコミー長官がロシア疑惑情報があると警告すると、トランプ氏は自分が脅迫されていると感じた。「コミーは彼の偏執狂ぶりを知らなかった」と彼女は書いている。トランプ氏はコミー長官を解任したが、それに対する反発は強かった。諜報機関や法執行機関の大統領に対する「条件設定」がそれで定まったのだ。

トランプ氏は議員や将軍たちを苛め、侮辱した。ペンタゴンでは軍の首脳たちに「お前たちは負け犬だ」と毒づいた。尻尾を振る議員には褒美をやり、忠誠を競い合うのを見て楽しんだ。だが外交や内政は、バイの取引やその場凌ぎでは管理できず、カネは万能でないことを彼は学習する。以前に寄付をした民主党議員が、弾劾を支持した時には驚愕したものだ。

ハーバーマン女史は、病気の友人を思いやり、面白くて一緒に居ると楽しい「良きトランプ」を認めている。ツイッター人格やメディアの描写に慣れた人々は、実際に大統領に会うと驚いたものだ。任期が進むにつれてその面は影を潜めた。2020年選挙でバー司法長官は「嫌な奴になるな」と頼んだが、彼は「コア支持者が望むのは戦士だ」と取り合わなかった。

熱狂的な政治基盤に応えるために、彼の行動は制限された。2018年、フロリダの高校で19歳の少年が17人を殺害した時、彼は銃規制を約束した。しかしNRAと語らって撤回した。コア支持者を尊重しているからではない。周囲には「アイツらは気違いだ」と語っている。それでも彼は中道にシフトして、支持者を失望させるようなリスクは取らなかった。

必然的に、彼はオバマの米国生まれに疑義を唱えるなどのお決まりの道を歩んだ。トランプ時代の醜聞を思うと、我々は衝撃を受けることさえ忘れたかのように思える。ハーバーマン女史はいみじくも、「彼は政治家への期待値を下げた」と嘆く。彼女による赤裸々な描写は、トランプ模倣者たちを停止させよう。彼は今さら自分自身から逃げられないが、他の米国民はそうではない。自らの弱さを嘆くのではなく、知恵のある指導者を選べばよいのだ。

<From the Editor> 長野市にて

先日、運転免許の更新に出かけて一般講習を受けてきました。

真面目に聞いてみると、講習は意外と面白いものです。横断歩道で歩行者がいるときに、ちゃんと止まってくれるクルマは全国平均では30%程度だが、わが千葉県ではそれが25%となるらしい。「もっと優しく運転してください」と言われると、なるほど納得である。

真面目な話、千葉県内のドライバーは運転が荒いと思う。その証拠に、たまに故郷の富山市に戻ってレンタカーを運転すると、まるで自分が羊の群れに迷い込んだ狼のように感じられてしまう。それくらい富山のドライバーが大人しく感じられるのである。

ところが長野県では、なんと横断歩道で85%ものクルマが止まってくれるのだという。とても同じ日本とは思えない。なぜこんなに差がつくのだろう??

たまたま先週、長野県信連さんの講演会で長野市を訪れる用事がありました。現地の方々に、「長野県では85%ものクルマが横断歩道で止まってくれる、というのは本当でしょうか?」と尋ねてみました。するとこんな返事が返ってきました。

「ああ、それはそんなもんでしょう」

「ただしそれは長野市内で顕著な傾向。松本市だとあまり止まってくれない」

「長野市内の交通事情に慣れている人は、他の街では危険に感じるかも」

「運転手さんが気の毒だから、意味なく横断歩道では立ち止まらない、と心がけています」

どうやら信憑性は高いようです。実際に長野市内を歩いてみると（と言っても、長野駅と善光寺の間を往復しただけですが）、やたらと信号が多い街であって、そもそも信号のない横断歩道はそれほど多くない、という面もあるように感じられました。

さて、その善光寺に行ってまいりました。「1400年もの歴史があるから無宗派である」とか、「なぜか昔から女人禁制ではなかった」といったところが、いかにも長野っぽくて好感度が大であります。諏訪大社もそうですけど、なぜ信州にはかくも歴史の古い神社仏閣が存在し、なおかつ全国に展開しているのか。うちの近所では、柏市にも流山市にも諏訪神社があって、地元の香取神社などにもけっして負けていないのです。これ、誰か研究しておられませんかねえ。



善光寺に来たからには、「お戒壇巡り」を試さなければならない。漆黒の闇の中を、足元の小さな明かりだけを頼りに奥に進む。幸いにも「極楽の錠前」に触れることができました。「錠前に触れられなかった不幸な男」になることは避けられました。善光寺でひいたおみくじは「中吉」でした。考えてみたらもうこの年代になりますと、「凶」さえ引かなければいいようなものですな。

ということで、講演会の前の短い時間を使ったプチ観光でした。ちなみに JA 長野さんからはお土産にご当地産のシャイン・マスカットを頂戴したりして、大変に美味でありました。ご馳走様でした。

* 次号は 10 月 28 日（金）にお届けします。

編集者敬白

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記までお願いします。

〒100-8691 東京都千代田区内幸町 2-1-1 飯野ビル <http://www.sojitz-soken.com/>

双日総合研究所 吉崎達彦 TEL:(03)6871-2195 FAX:(03)6871-4945

E-mail: yoshizaki.tatsuhiko@sojitz.com